

東海村研究支援事業 10 年間を振り返って

永目 裕子

私は村の研究支援事業に村民として 10 年間関わってまいりました。
とはいえ、そこにいて、見て聴いていた程度でしたが、、、。

10 年間を振り返って、一番印象に残っているのは、第 1, 2 回支援対象の渡辺
凜さん、寿楽 浩太さんの

「どのような高レベル放射性廃棄物の” 処分” が望ましいか？

—市民と専門家の対話と協働の手法開発— 」

この研究が現場で活かされることを期待したいのは、もちろんですが、その中で
「どんな東海村に住みたいか？そのために原発に伴う廃棄物はどう処分するの
がいいと思うか？」という住民への問いかけが住民である私に刺さりました。若
いお嬢さん（当時、渡辺さんは院生でした）から、物事を為すときの考え方の手
順を教えられた気分でした。

望む未来に、〇〇はどんな形であるとよいか。

今、何をどう為すと、未来に〇〇はその形になるか？

また、この文章を書くために本事業で支援対象となられた若い研究者を振り返
って見たところ、女性が案外多いことに気づき、ちょっとうれしく、誇らしい気
持ちになりました。

原発立地の東海村がおこなった 10 年間のこの社会科学研究支援事業は東海村の
未来のためによいことだったと思います。

さらにブラッシュアップされて、長く継続されることを望みます。

【経歴】

2014 年度～2023 年度 選考委員

※2012 年の「TOKAI 原子力サイエンスタウン構想」の議論にも参加されました。